

私は喉が渴いて死にそうで、

"サムソンは真新しいろばのあご骨を見つけ、手を伸ばして取り、それで千人を打ち殺した。

サムソンは言った。「ろばのあご骨で、山と積み上げた。ろばのあご骨で、千人を打ち殺した。」

こう言い終わると、彼はそのあご骨を投げ捨てた。彼はその場所を、ラマテ・レヒと名づけた。

そのとき、彼はひどく渴きを覚え、主を呼び求めて言った。「あなたは、しもべの手で、この大きな救いを与えてくださいました。しかし今、私は喉が渴いて死にそうで、無割礼の者どもの手に落ちようとしています。」

すると、神はレヒにあるくぼんだ地を裂かれたので、そこから水が出た。サムソンは水を飲んで元気を回復し、生き返った。それゆえ、その名はエン・ハ・コレと呼ばれた。それは今日もレヒにある。

こうして、サムソンはペリシテ人の時代に二十年間イスラエルをさばいた。"

士師記 15章15～20節

聖書 新改訳2017©2017新日本聖書刊行会



導入

士師記の時代は、カナン之地として知られる場所に入植し、12部族の所有地として与えられた時から始まりました。しかし、ヨシュアが最後に言った「私と私の家は主に仕える。」(ヨシュア24章15節)という言葉から察すると、人々は神から離れ、その教えに背き、他の神々の崇拝に走り、同胞との争いや他国からの苦しみに苦しむようになりました。この期間は12部族に割り当てられた土地において、紀元前12世紀から11世紀にかけての約200年間にわたり、士師と呼ばれる指導者が現れ、国を回復へと導く過程が描かれています。

士師記に登場する士師たちは、

オテニエル、エホデ、シャムガル、デボラ、ギデオオン、トラ、ヤイル、エフタ、イブザン、エロン、アブドン、サムソン、の合計12名の士師が登場します。この200年の間に、隣国から敵対的な民族などが現れ、これに立ち向かうために士師たちは命を捧げました。

現在ではガザ地区がペリシテの地となります。

1. 神が用いる時には、ろばのあご骨でさえ武器になり、敵を倒すことができます。捨てられた物であっても、神の計画に従えば用いられることがあります。
2. しかし、今日の聖書の一節「私は喉が渴いて死にそうで、」という言葉を考えてみると、喉が渴くというのは身体中で必要な水分が急速に不足する状態を指し、思考能力、視野、聴覚などの機能が著しく低下し、瀕死あるいは機能停止状態に近づくことを意味します。
3. 心の渴きも似たようなものです。極度のストレスによって内臓が圧迫され、身体の不調が表れ、精神的にも壊れそうになる状況です。この二面性を垣間見ると、この聖句が身近に感じられます。イエス様も「喉が渴く」と言われました。ここには、私たちの想像を絶する苦しみと嘆きが言葉で表現されています。

"それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渴く」と言われた。"

ヨハネの福音書 19章28節

"私の力は土器のかけらのように乾ききり舌は上あごに貼り付いています。死のちりの上にあなたは私を置かれます。"

詩篇 22篇15節

"彼らは私の食べ物の代わりに毒を与え私が渴いたときには酢を飲ませました。"

詩篇 69篇21節

4, イエス様は渴きを知っておられる方です。

"イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。"

ヨハネの福音書 6章35節

士師記に登場する士師たち

| 士師の名前 | 士師記の箇所 | 出身部族 | 統治年数 | おもな出来事 |
|-------|--------------|--------|------|------------------------|
| オテニエル | 3章7～11節 | ユダ族 | 40年 | アラム・ナハライムの軍勢を打ち破る。 |
| エフデ | 3章12～30節 | ベニヤミン族 | 80年 | 左利きの勇者で、モアブ人を破る。 |
| シャムガル | 3章31節 | カナン人? | 不明 | ペリシテ人600人を殺し、イスラエルを救う。 |
| デボラ | 4章1節～5章31節 | エフライム族 | 40年 | カナン王ヤビンの大軍をバラクとともに破る。 |
| ギデオオン | 6章1節～8章35節 | マナセ族 | 40年 | 異教の偶像を破壊し、ミディアン人と戦う。 |
| トラ | 10章1～2節 | イッサカル族 | 23年 | エフライムの山地シャミルに住む。 |
| ヤイル | 10章3～5節 | ギルアド族 | 22年 | 30人の息子は30の町を持っていた。 |
| エフタ | 11章1節～12章7節 | ギルアド族 | 6年 | アンモン人、エフライム人を打ち破った。 |
| イブツァン | 12章8～10節 | ゼブルン族 | 7年 | 30人の息子と30人の娘をもっていた。 |
| エロン | 12章11～12節 | ゼブルン族 | 10年 | 10年間イスラエルをさばいた。 |
| アブドン | 12章13～15節 | エフライム族 | 8年 | 40人の息子と30人の孫を持っていた。 |
| サムソン | 13章1節～16章31節 | ダン族 | 20年 | 怪力の持ち主。ペリシテ人と戦った。 |

情報として

士師ごとの敵対民族

オテニエル→アラム人、ナハライム人

エフデ →モアブ人、アモン人、アマレク人

シャムガル→ペリシテ人

デボラ →カナン人

ギデオオン →ミディアン人、アマレク人

エフタ →ペリシテ人、アモン人

サムソン →ペリシテ人

士師記の時代における情勢

ペリシテ人が一時的にイスラエルより強かった理由はいくつかあります。士師記の時代において、ペリシテ人はイスラエルとの対立や支配を試みました。以下はペリシテ人がイスラエルより強かった主な理由。

武力と技術

ペリシテ人は当時の先進的な武器や戦術を持っており、鉄の武器や戦車などの戦闘技術を駆使していました。これに対して、イスラエルは農村社会から軍事的な組織を整えるまでに時間がかかり、技術的に劣っていることがありました。

地理的な要因

ペリシテ人は、現在のイスラエル地域の沿岸部に位置しており、戦略的に重要な地理的位置を占めていました。このため、彼らは貿易路の制御や海洋交通路の支配を行い、経済的にも強力でした。

連合と組織力

ペリシテ人は他の周辺地域と同盟を結び、軍事的な力を強化していました。一方、イスラエルは部族ごとに分かれており、連携が不十分だったため、ペリシテ人との対抗には困難が伴いました。

経済的な要因

ペリシテ人は鉄器時代の技術を用いて金属加工や農業を発展させ、経済的な豊かさを享受していました。対照的に、イスラエルは時折略奪や略奪に遭い、経済的に困難な状況に置かれました。

※ 上記はホームページに掲載されているものも活用し参考にしました。